



ともに伸びる馬室っ子 ~あせがきらきら馬室っ子~

令和6年12月2日

12月号

鴻巣市立馬室小学校

電話 541-0578

馬室小だより



心に残る本や詩との出会いを ～ 秋の読書月間に寄せて ～

校長 齋地 満

校内音楽会では、たくさんの皆様にお越しいただき、ありがとうございました。子供たちは、練習の成果を本番で十分に発揮することができました。職員からも、「一番いい演奏ができました。」との声が多く聞かれ、本番に強い馬室っ子らしさを感じました。また、市内音楽会では5年2組が、代表としてすばらしい合唱を披露して大きな拍手をいただきました。馬室っ子は歌が好きで上手です。優しい声やきれいなハーモニーは、聞いていて心地よさを感じます。そして、音楽を通して一回り成長する姿を見ることができました。学校目標「ともに伸びる馬室っ子」を実感できたすばらしい音楽会となりました。

さて、図書室で「希望の図書館」という新刊が目にとまったので、読んでみました。主人公のラングストンは、本の大好きな中学生です。母を亡くして故郷のアラバマから大都会のシカゴへ父と引っ越しますが、新しい環境になじめません。母から、「黒人は、図書館に入れてもらえない。」と聞いていたのですが、誰もが自由に入れる図書館を見つけ、本に囲まれ静かに読書できる図書館が心の休まる場所となります。そして、自分と同じ名前の詩人、ラングストン・ヒューズの詩に夢中となり、それが心の支えになると周りの人達との関係も変化していきます。何かひとつでも、「だれにも負けないくらい好きなもの」があると、それを支えに強くなれるのでしょうか。高学年向けですが、大人も楽しめる内容です。機会があれば、お子さんとご一読ください。

先日、詩人の谷川俊太郎さんが、お亡くなりになりました。「生きる」という作品は、昔から国語の教科書に掲載されており、卒業を控えた6年生が出会います。この詩を初めて読んだときは、「生きていくということ」が、なぜ、ミニスカートやプラネタリウム、ピカソなのかよくわかりませんでした。しかし、教師となって再び出会うと、日々の生活の中で当たり前と思えることを意識したり価値づけたりすることで、「いま生きている」と実感すること、経験や感覚によって人それぞれに「いま生きている」と感じるものに違いがあることに気づき、詩のすばらしさに触れることができました。

読書は、言葉を学び、感性を磨き、表現力を高め、創造力を豊かなものにしてくれます。また、人生をより深く生きる力を身に付けていくことができます。秋の読書月間に続いて冬休みも読書に親しめるといいですね。良いお年をお迎えください。

生きる

谷川俊太郎

生きているということ
いま生きているということ
それはのどがかわくということ
木もれ陽がまぶしいということ
ふっと或るメロディを思い出すということ
くしゃみすること
あなたと手をつなぐこと

生きているということ
いま生きているということ
それはミニスカート
それはプラネタリウム
それはヨハン・シュトラウス
それはピカソ
すべての美しいものに出会うということ
そして
かくされた悪を注意深くこぼむこと

生きているということ
いま生きているということ
いま速くで犬が吠えるということ
いま地球が廻っているということ
いまだどこかで産声があがるということ
いまだどこかで兵士が傷つくということ
いまふらんこがゆれているということ
いまいまが過ぎてゆくこと

生きているということ
いま生きているということ
鳥ははばたくということ
海はどろどろということ
かたつむりははうということ
人は愛するということ
あなたの手のぬくみ